

学校と地域を結ぶ絆づくり
～ 未来を担う子どもたちのために ～

提 言 書

平成28年3月

小城市社会教育委員の会議

〇はじめに

平成27年度の社会教育委員の会議では、学校と地域の連携により、地域の活性化や子どもたちが安心して暮らせる環境づくりについて協議を重ねてきました。

まず、学校と地域のかかわりについて検討し、地域で出来るもの、学校が地域に求めていることのアンケート調査を行い、現在の取組みの状況などを共通認識しました。

また、砥川小学校、芦刈観瀾校の取組などを現地で体験、視察を行いながら、提言を取りまとめていきました。

その結果、学校・家庭・地域が連携協力し、子どもの教育活動を支援する仕組みづくりについて提言をまとめたところです。

この提言書が、小城市の社会教育のさらなる充実と促進へとつながることを期待します。

平成28年3月

小城市社会教育委員の会議

○小城市の現状と課題（現状分析・課題の発見）

－ 現状分析 －

未来を担う子どもたちの豊かな学びを支えていくためには、学校だけでなく、学校・家庭・地域社会が、それぞれ適切な役割分担を果たしつつ、相互に連携して行われることが重要です。

社会教育委員の会議では、学校と地域をつなぐコーディネーター事業を行っている学校を視察し、現在の取組状況について確認しました。

【砥川小学校の取組】

○砥川小サポーター制度

《経緯等》

児童一人一人に自信を持たせ、自己肯定感を高めることは、児童の将来にまで関わる大切なことであり、必要なことである。児童を褒め自信をもたせるため等を目的とし、校長先生がコーディネーターとしてリーダーシップをとられ、平成25年9月に制度を発足された。

地域、保護者、学校の三者連携を推進し、開かれた学校づくりをめざす意味からも、砥川小サポーター制度の取組は児童の自己肯定感を高める手立てであり、学校に多くの保護者や地域の方々が訪れ、廊下を行き来するだけで校内の安全が保たれている。

《活動内容》

- 環境ボランティア
定期的に学校の玄関の掃き掃除、プランターの花のお世話など。
- 安全ボランティア
登下校時の安全確認、プール開始時の目隠しネットの設置など。



- 学習ボランティア
朝の活動（計算や音読など）の支援、家庭科のミシン指導など。

- 毎月「サポーター便り」を発行

《登録者数》

- 平成25年度 23人
- 平成26年度 43人
- 平成27年度 47人



【芦刈観瀾校の取組】

○学校・地域夢つなぎ応援事業

《経緯等》

平成20年、県の「学校地域連携コーディネータ配置事業」の委託を受け、学校と地域のコーディネートを行う人材を配置し、学校が地域に求めているものと、地域に内在している人材の結びつきを深めていく活動を展開。

3年間補助を受けながら活動をつづけ、平成23年度からは、地域の組織・団体・個人が連携・協力して学校を支え、地域で育つ子どもたちの教育に寄与することをひとつの大きな目的とし、「学校・地域夢つなぎ応援事業」を市単独事業で進めていた。平成27年度からは、「学校地域支援本部推進事業」として補助金を受ける。



《活動内容》

平成25年度支援実績

学校名	区分	読み聞かせ	学習支援	野菜・豚汁づくり指導	海苔巻き指導	習字指導・支援	調理実習支援	廃油石鹼づくり指導	和紙づくり指導	裁縫指導・支援	ミシン実習支援	昔遊び指導	太鼓浮立体験指導	芦刈音頭指導	ふるさと展覧会	ボランティア研修会	図書館まつり	合計
芦刈中学校	人数	52	13											22				87
芦刈小学校	人数	125	166	20	14	36	21	6	3	25	43	10	9	9	24	26	13	550
合計	人数	177	179	20	14	36	21	6	3	25	43	10	9	31	24	26	13	637

平成26年度支援実績

学校名	区分	読み聞かせ	学習支援(のびのび)	野菜・豚汁づくり	海苔作り実演と講話	習字指導・支援	調理実習支援	廃油石鹼づくり指導	和紙づくり・水墨画	裁縫指導・支援	ミシン実習支援	昔遊び指導	太鼓浮立体験指導	芦刈音頭指導	ふるさと展覧会 及び社会科	ボランティア研修会	遠足・スケッチ・干 潟体験見守り	合計
芦刈中学校	人数	59																59
芦刈小学校	人数	101	254	29	9	35	25	10	13	25	72	8	6	7	47	24	19	684
合計	人数	160	254	29	9	35	25	10	13	25	72	8	6	7	47	24	19	743

《登録者数》

- ・平成25年度 210人
- ・平成26年度 190人
- ・平成27年度 172人



1. 学校と地域をつなぐコーディネーターの必要性など

○人間関係の希薄化

近所付き合いの希薄化が進み、隣人が何をしているか分からない状況であったり、大人たちの社会参加意識が薄れているなど、地域の教育力が低下しています。

○コミュニケーション力の低下

ゲームやテレビ等一人で遊んで過ごす時間が多い子どもの増加により、思いやりの心やコミュニケーション能力の不足、うまく自分の思いを伝えられない子どもが増加しています。

【主な意見】

- 子どもは、ひとりで家にいるような時、1日中ゲームをしている状況である。安心できる場所。どこか行けばお話しができるような場所が欲しい。
- 公民館活動をされているような方がコーディネーターとなり、学校とボランティアをつなぐ役割になるような活動がいいのではないだろうか。人材発掘に役立つ。
- コーディネーターには、報酬をきちんと支払うような形をつくっていただきたい。
- 保険が課題のひとつとなる。芦刈観瀾校の夢つなぎ事業は、公民館事業のため保険対応できる。
- 学校とのつながりが大切である。
- 地域と学校をつなぐ役割として、社会教育委員の存在も広めていきたい。

2. 学校と地域の連携

○家庭の教育力の低下

核家族化の増加により、祖父母等の家族からしつけや地域に伝わる習わしを伝承するといった家庭の教育力が低下しています。

○異年齢間の交流の減少

公園や広場等で遊ぶことの減少により、異年齢集団と遊ぶ機会が減少し仲間づくりができない子どもが増加しています。

【主な意見】

- 学校だけでも家庭だけでもなかなか育ちにくい環境にいる多くの子どもたちを「地域ぐるみで子育てを」と願っている。
- 学校と地域が協力し、登下校時などの見守り、安全管理に努め、育成に努めなければいけない。
- サポーターとして3年目の活動で、子どもを叱ることができるようになり、子どもたちも寄って来てくれるようになった。
- サポーターが学校の廊下を歩くことだけでも安全が保たれる。
- サポーターの方が、自ら企画し子どもにフラワーアレンジメント教室が開催された。
- サポーターがほめることで子どもたちが自信をもつため、地域の方も元気になり、地域の底力になっていく。
- 「ボラティアをして救われたのは自分だった。」という言葉がある。その活動が生きがいになり、成長できるものとなっている。
- 牛津中学校では、老人クラブと子どもたちの交流があった。参加したが、有意義だと感じた。

3. 学校と地域が連携するための仕組み

○地域のコミュニケーションの希薄化

地域で活動している子どもの姿が減少し、地域が子どもの居場所でなくなってきています。

○地域とのつながりの希薄化

地域の活動に参加する子どもの減少や地域の組織機能の低下等、地域に期待する役割の低下や地域のつながりが希薄化しています。

【主な意見】

- 学校が何を望んでいるか知ることが必要。
- 個性ある特色ある地域が集まり、守り、育ち、エネルギーをもってひとつの地域（市）となることが、ひとつになるというイメージだと思う。
- 現在、どの小学校も何らかの形で地域の方が関わっている。（ゲストティーチャー、登下校見守りなど）今は、学校から地域に出て行くような風潮である。
- 学校の情報（授業参観などのお知らせ）が市民に届くようになればいいかと思う。牛津っこネットワーク通信（取材をして書き1月に1回発行、情報発信が中心）が牛津地区の情報を発信しているが、小城市全体の学校情報が市民に届いたらいい。
- 学校と地域の人が、学校行事などについて、話し合いができる場を設ける必要があるのではないか。

○提言

— 学校と地域の連携 —

社会の変化により、子どもたちを取り巻く環境には厳しい現状があり、学校には多くのことが求められるようになってきました。

未来を担う子どもたちの社会性・自主性、創造性等の豊かな人間を涵養するためには、学校・家庭・地域が連携する仕組みを構築し、社会全体で子どもたちを育むことが大切です。

◆学校と地域を結ぶコーディネーターを育成する

子どもにとって、地域の大人と活動することは、大人の豊富な経験や知識・技術などから多様な学びができるとともに、コミュニケーション能力の向上など社会性を身に付ける機会にもなります。

そのためには、地域をよく知り、子どもたちと地域とをつなぐ窓口となる人（コーディネーター）の存在が必要であり、その役割はとても重要です。

このコーディネーターが学校が必要としているボランティア情報の地域への発信、地域情報の学校への提供、ボランティア間の連絡調整を行うなど、地域力を生かした学校支援を行うことにより、子どもは多様な人々とのふれあいとおした豊かな体験をすることができ、コミュニケーション能力や社会性、主体性を培うことができます。

一方、コーディネーターやボランティア活動に対する危機管理や事故の対応等にも配慮が必要です。

◆学校と地域がつながる仕組みをつくる

学校が地域に開かれ、ボランティアや地域の窓口となるコーディネーターが効果的に活動するには、学校の中にコーディネーター等の活動拠点が必要です。

例えば、余裕教室を地域交流室としたり、音楽室、家庭科室、学校図書館等を地域の人々の生涯学習の場として開放したりすることにより、コーディネーターやボランティアがいつでも気軽に情報交換したり、話し合ったりすることができます。

学校が、地域の拠点となり、住民同士の交流や、大人と子どものふれあいの場となれば、活動のアイデアが生まれたり、楽しい企画を実施するなど、充実した活動へとつながっていきます。

子どもにとっては、様々な場で認められたり、褒められたりする機会が増え、自己肯定感を高めることができます。

◆「学校・家庭・地域」が連携・協働した取り組みを行う

子どもの成長にとって、学校、家庭、地域それぞれの重要性は言うまでもなく、各々が適切な役割を果たしながら、相互に連携することによって、より大きな子どもの成長に結びつけることができます。

具体的には、学びの拠点である学校、公民館等が連携・協働し、相互の交流を図り、地域と保護者との協力関係を強化することにより、地域住民の生涯学習の成果が学校や子どもたちの活動への支援に生かされます。更には、地域住民が、子どもたちからエネルギーをもらい、喜びや新たな生きがいを感じ、学びへの意欲を生み出すといった環境が生まれてきます。

このような学校・家庭・地域が連携して、子どもの教育活動を支援する仕組みづくりを推進していくことはとても重要です。

小城市社会教育委員名簿

(任期：平成27年4月1日～平成29年3月31日)

氏名	所属	備考
眞子雅允	学識経験者	
小柳容子	学識経験者	副委員長
下村彌須徳	学識経験者	
伊東スミエ	学識経験者	
長崎兼治	学識経験者	
武富ちえ子	学識経験者	
北島靖彦	学識経験者	委員長
古賀実千子	学識経験者	
唐島由晃	小城市PTA連絡協議会	
川端英二	小城市PTA連絡協議会	
山口正子	小城市校長会	
平川富久	小城市校長会	